

〈論 文〉

通訳訓練技法を利用した英語教育

Interpreter training as a teaching approach for English

板 谷 初 子

Hatsuko ITAYA

1. はじめに

2014年度から、本学において筆者が担当する専門ゼミナールで「通訳入門講座」を開講している。通訳学研究は、1950年代にヨーロッパで盛んになった(友野ほか2012)。日本では1990年に「通訳理論研究会」が発足し、本格的に通訳理論研究が始まった。この研究会は2000年に「日本通訳翻訳学会」に発展した。2017年度の学会員数は約500名である。日本の大学においては1980年代後半から、通訳学研究と通訳教育が行われるようになった。2012年時点では100以上の大学において通訳関連の授業が開講されており(ibid.)、近年通訳講座を開講する大学の数が急速に増加している。首都圏では東京外国語大学、立教大学、上智大学、青山学院大学、大東文化大学、国際基督教大学などが充実した通訳講座を開講しているほか、関西では神戸女学院大学、神戸市外国語大学、関西大学などが通訳翻訳専門教育を提供している。札幌では北海道大学、北星学園大学、北海学園大学、藤女子大学、札幌大学、東海大学札幌キャン

ンパスなどで通訳授業が行われている。本稿では、北海道武蔵女子短期大学で2014年度から筆者の専門ゼミナールで行ってきた「通訳入門講座」での取り組みとその目的、さらには今後の展望を概観する。

2. 札幌における他大学での通訳教育

前述した通り、札幌でも多くの大学で通訳訓練法を利用した英語教育が行われている。その一例として、東海大学札幌キャンパス国際文化学部国際コミュニケーション学科の「英語通訳入門」での取り組みを紹介する¹⁾。この講座は英語運用能力が高い学生のモチベーションを高めることを目的として、2014年4月に開講された。初年度は40人が履修したが、その後大学が受講制限を行い、英検2級またはTOEIC400点以上の証明書を提示することが受講の条件となった。それ以降受講生は6名から10名以下に抑えられている。この受講制限は、担当講師ではなく大学側からの発案で行われた。成績上位の学生を育てようとする大学の姿勢が認識できる。受講生のほぼ全員が、短期または長期留学を経験しており、北欧からの留学生と大学の寮で暮らすDorm Leaderと呼ばれる学生も受講している。道内の他大学においても、通訳関連講座はゼミではなく通常の授業として開講されている。

3. 大学英語教育に通訳訓練技法が活用されている理由

第1節で述べたように、北海道内外の大学では、通訳訓練技法を取り入れた英語授業が行われている。しかしこれらの授業の目的は通訳者養成ではない。通訳訓練技法は英語力向上に大きな効果があることから(染谷1996:2002角山)、英語教育の一方法として授業に取り入れられていると考えられる。この通訳翻訳教育を外国語教育に取り入れるアプローチはTILT (translation in language teaching) (Cook, 2010) と呼ばれている。通訳教育が日本の大学で広く行われるようになったもう一つ

の理由として、大学教育を取り巻く社会環境の変化がある。鳥飼（2014）によると変化の具体例として（1）もはや大学は象牙の塔ではなく、社会のニーズに応えることが求められている（2）大学間で学生確保の競争が激化しているため、受験生が魅力的だと感じる講座を設ける必要がある（3）1987年臨時教育審議会答申で英語教育の改革が強く要請されたことを受け、1989年に告示された学習指導要領で英語教育の目的が「コミュニケーション」であると明記された、ことなどが挙げられる。これらの理由から通訳訓練技法を活用した教育法が注目を浴びるようになった。さらには第22期国語審議会答申（2000）でも、「今後は大学における学部・大学院の教育を充実し、国際化に対応するための日本的資源として、高度に訓練された職業通訳者及び高い見識を有する通訳理論の研究者を養成することが望まれる」と提言しており、通訳訓練技法を取り入れた授業の必要性を裏付けている。

またISO（国際標準化機構）で策定中の通訳翻訳に関する各種国際規格（ISO17100など）では、プロ翻訳・通訳者の筆頭定義として「翻訳通訳の学位取得者」という項目が明示されている。そのため通訳翻訳業界からも大学に対する期待や関心の声が高まっている（武田ほか2014）。

4. 通訳訓練技法

主な通訳訓練技法（表1）のうち、本講座でこれまでに採用してきた訓練法を紹介する。

4.1 専門ゼミナール「通訳入門講座」で取り入れている個別技能訓練

4.1.1 クイックリスポンス

日本語（または英語）を聞いてすぐにそれを声に出して英語（または日本語）にする。簡単な作業に見えるが、実際におこなうと初心者には難しい。単語を「聞いたことがある」「なんとなく意味が想像できる」と

表 1 通訳訓練の中で採用されているおもな訓練／指導項目（染谷 1996）

A 通 訳 演 習
1. 逐次通訳演習 2. サイト・トランスレーション演習 3. 同時サイトラ演習 4. 同時通訳演習
B 個別技能訓練
5. シャドーイング [=同時リピーティング] 6. リテンション=リプロダクション [=逐次リピーティング] 7. クイックレスポンス 8. パラフレージング 9. ノートテイキング 10. 大意要約 [大意要訳] 11. スラッシュ・リーディング [SG リーディング] 12. 文頭からの訳出技法 (=通訳文法) の習得 13. デリバリー
C そ の 他
14. 音読とプロソディー分析（プロソディーセンスの養成と音声学上の基礎知識の確認） 15. 区切り聞き／訳（スラッシュリーディングの音声版。「文頭からの理解」の強化訓練の一環） 16. スピードリーディング（英文文字情報処理能力の強化訓練） 17. ブラックボックスリーディング（未知語への対応力強化訓練） 18. ディクテーション（リスニングにおける弱点の認識と補強。基礎的な音声学の学習） 19. 語彙増強（特に決まった訓練方法はないが、何らかの形で必ず取り入れられている）

いうレベルから「瞬時に英語（または日本語）に変換できる」というレベルにするためには、予習が欠かせない。「クイックレスポンス」の応用として、「時差クイックレスポンス」がある。通常の「クイックレスポンス」で語彙が定着してから、一つまたは二つ前に聞いた語の意味を言うことで、集中力を養うことができる。同時通訳は、訳しながら耳では別の発言を聞き、次にそれを訳していくということの繰り返しである。そのためこの「時差クイックレスポンス」は、同時通訳の初期訓練にもなる。また語学学習者は、同じ学習法を繰り返すよりも、違う学習法を組

表2 『TOEIC150点アップを目指す通訳訓練法』Unit1 語彙リスト (p.2)

work for～	～に勤める	belong to～	～に所属する
freshman	一回生	on business	仕事で
in the future	将来	cook for oneself	自炊する
travel agency	旅行会社	study abroad	留学する
extended family	大家族	have little trouble doing～	～にほとんど苦勞しない

み合わせることで学習意欲が高まるため (Dornyei, 2001)、「時差クリックリクスポンズ」は通常の英語の授業でも有効な学習法である。表2は採用テキスト『TOEIC150点アップを目指す通訳訓練法』(越智 2010)のUnit1に掲載されている語彙リストの一部である。例えばこの語彙リストで1回遅れのクイックリクスポンズを行うと仮定しよう。教師が work for～と言ったときに学生は何も言わず、教師が freshmanと言った直後に「～に勤める」、in the futureと言った直後に「一回生」と一つ前の単語の意味を学生に素早くリクスポンズさせる。2回遅れであれば、教師が work for～と言っても freshmanと言っても学生は何も言わない。教師が in the futureと言ったときに初めて学生は2つ前の語の意味である「～に勤める」を発声し、教師が travel agencyと言ったときに「一回生」と発声する。同様の訓練は学生同士がペアになって行うこともできる。

4.1.2 シャドーイング

通訳訓練技法で最も広く活用されているのが「シャドーイング」である。これは英語の音声聞きながら、それと同時にその英語を再現していく訓練だ。中学・高校の授業でも広く取り入れられている。本学の学生に尋ねても、高校の授業で「シャドーイング」を体験したことのない学生はごくまれである。「シャドーイング」が通訳技能の向上に及ぼす効果については否定的な見解もあるが(染谷 1996)、英語力向上に関し

ては一定の効果があることが複数の研究で検証されている（染谷 1996；玉井 1997；八島 1988；角山 2002；飯塚 2009；Hamada 2015）。とりわけリスニング力とスピーキング力強化に欠かせないプロソディー感覚の養成に効果的である。プロソディーとは「アクセント、イントネーション、センスグループ間のポーズの置き方、センテンス・ストレス、あるいは音の連結や弱化、吸収などといった現象を含むさまざまな音声要素の総称」（染谷 1996）であり、コミュニケーションの重要な要素である。「シャドーイング」は、文字を見ながら音を再現する場合には「オーバーラッピング」と呼ばれることもある。筆者の授業においては、まず「オーバーラッピング」を行い、その後「シャドーイング」に移行することで、無理なく訓練を続けられるようにしている。英語を声に出して話すという宿題は、学生が実際に行ったかどうかを確認する方法が限られている。そのため筆者はこれまで、読む・聞くというインプットを宿題として課し、授業では英語を声に出すアウトプットが行えるような環境作りを心がけてきた。現在ではスマホを活用した授業が行われるようになってきている（西畑 2017）。筆者の授業内外でも、今後はスマホで録音した音声を添付ファイルとして提出するなどの方策をとり、学生が授業外で様々な英語学習を行うことを促していきたいと考えている。

4.1.3 リテンション

「リテンション」とは、記憶を保持する訓練である。同時通訳では当然のこと、逐次通訳時でもメモをとることができない場合もある。またメモをとったとしても、「通訳メモ」はあくまで記憶の保持を補助するためのものであり、基本は記憶を頼りに通訳をする。「リテンション」の初期訓練の一例として、誰でも知っているような 10 個程度の英単語を口頭で伝え、それを再現してもらおうというものがある。例えば次の〔例 1〕〔例 2〕は本学での授業や高校出張講座で使用したことのある語群である。

〔例 1〕 lemon strawberry apple banana mango pineapple peach
cherry orange kiwi

〔例 2〕 elephant tiger snake fox kangaroo monkey frog cat bear
giraffe

上記の例のような一般的な語彙で「リテンション」の訓練をした後に、第 4.1.1 節、表 2 で示したような、実際に通訳練習をする文章に出てくる語彙で「リテンション」の訓練を行うと、通訳の際には語彙に自信を持って訳出することができるようになる。

4.1.4 リプロダクション

「リプロダクション」とはその辞書的意味「再生」「再現」が示すように、聞いた英文を再現する練習法である。中学、高校の授業では教師が“Repeat after me.”と言い、教師が読んだ後に学生が同じ文章を読むという光景がよく見られる。「リプロダクション」では、音声だけを聞いて同じことを行う。これも初心者にとっては案外難しい作業である。リスニングだけに全神経を集中させると、聞いた情報を記憶する余力が残らない。また、そもそも語彙・構文を理解していない文章を覚えることは容易ではない。「リプロダクション」ができるということは、その文章に含まれている語彙・構文・発音といった基本知識が定着しているということである。そのため、「リプロダクション」は予習を促すアウトプット活動として取り入れている。この「リプロダクション」に関して、本講座での効果が発揮された事例を紹介する。筆者は英文科 2 年生の習熟度別ライティングクラス 5・6 組を担当している。そのクラスで短い文章を「リプロダクション」させた際に、筆者の専門ゼミ生はゼミを受講していない学生の 2 倍の長さの文章を流暢に再現することができた。訓練は無駄ではないと実感できた出来事であった。

「リプロダクション」は単文から始め、徐々に文章の数を増やしていくことができる。筆者は指導技術の向上と学術研究の目的で自らも通訳業務を行う傍ら、通訳専門学校でプロの通訳者と共に通訳訓練を受けている。その授業では100語前後のストーリーを英語で聞き、その「リプロダクション」を行う訓練も行われている。この訓練は筆者にとっても大変ハードルの高い訓練ではあるが、自らが難しい課題に挑むことで学生の気持ちを理解することは教師にとって有益なことだと考えている。

4.1.5 パラフレージング

「リプロダクション」が聞いたとおりに英文を再現するのに対して、聞いた英語とは可能な限り違う表現を用いて同じ内容を再現する訓練は「パラフレージング」と呼ばれている。この訓練も一文から始め、徐々に英文量を増やしていくことができる。次の英文は2014年9月20日にイギリス人女優エマ・ワトソンが国連で行ったスピーチの冒頭部分である。この英文を聞き「パラフレージング」を行うと、どのようになるのか一例を示したい。

[原文]

Today we are launching a campaign called “HeForShe.” I am reaching out to you because I need your help. We want to end gender inequality — and to do that we need everyone to be involved. This is the first campaign of its kind at the UN: we want to try and galvanize as many men and boys as possible to be advocates for gender equality. And we don’t just want to talk about it, but make sure it is tangible.

[パラフレーズ例]

Here and now we are declaring the start of the campaign “HeForShe.” I am speaking to you today as I would like your support to eradicate gender inequality. I would like all of you to be a part of this movement. This is the first UN campaign of this sort. We want as many males as they can to be involved and advocate gender equality. Our goal is not just to talk about it. We want to witness concrete results.

この作業は、脳の奥にあるかつて覚えた表現を絞り出すプロセスとも言える。難易度が高く、これまで筆者の授業ではあまり行ってこなかったが、今後はこのようなトレーニングも行えるレベルに授業を高めていきたいと思っている。

4.2 専門ゼミナール「通訳入門講座」で取り入れている通訳演習

4.2.1 サイトトランスレーション

この訓練は通訳者たちの間では「サイトラ」と呼ばれている。文字情報を見ながら、話すスピードで声に出して訳出していくという作業である。英語と日本語は語順が逆であるが、できるだけ戻り読みをすることなく、流れるように自然な日本語にしていくことが目標である。この訓練は訳出技術向上に大変効果が高いと言われている。通訳の現場では訳出の1分前に原稿が手に入ることもある。意味のかたまりごとにスラッシュ（斜め線）を入れながら訳語をつなげていくことは、通訳に欠かせない技術である。第4.1.1節で紹介したテキストのUnit1に次のような英文がある。通常であれば(A)のように訳すところであるが、サイトラでは(B)のような訳出をして、戻り読みを回避する。黙読で理解するには簡単な文章でも、声に出して戻り読みをせず一定のスピードで訳し

続けていくのは、それほど楽なことではない。

原文：I got homesick at first / when I started college life here in
Osaka.

訳出 (A)：ここ大阪で大学生活を始めたときに、最初ホームシック
になりました。

訳出 (B)：最初ホームシックになりました。ここ大阪で大学生活を
始めたときです。

4.2.2 逐次通訳演習と通訳メモ

「逐次通訳」とはスピーカーが話した後、通訳者が訳していく形態である。わかりやすい例としてはプロ野球のヒーロー・インタビューや、テレビの歌番組で外国人歌手の言葉を通訳をする場面などがある。これらの状況では、テレビの放映時間などの制限があることから、1回の発言は短いことが多い。しかし同じ逐次通訳でも、「日本外国人特派員協会」の記者会見などでは様子が異なる。ここは歴代首相、政治家、オリンピック金メダリストなどそうそうたる人たちが招かれ、会見をする場所である。一例として2014年12月17日に当時読売ジャイアンツの監督であった原辰徳氏が、元・大リーガー松井秀喜氏と共に東日本大震災復興イベント「トモダチ チャリティベースボール ゲーム」について行った記者会見をとりあげる。この会見で原辰徳氏は冒頭の挨拶で3分半話し続けた。これは通訳泣かせな挨拶である。3分半のスピーチを詳細まで覚えていることは熟練の通訳者にとっても難しい。そこで通訳者は「通訳メモ」という特殊なメモをとり、できるだけ正確に訳出するよう努める。

では、このときの通訳者はこの3分半のスピーチをどのようにメモしたのであろうか。訳語は原監督の話を正確に伝えていたため、メモがしっかりとれていたと推測できる。しかし人が話すのと同じスピードで全ての言葉を書き留めることは不可能である。仮にそのようなことに挑むと、今度は話についていけなくなる。そのため通訳者は言葉そのものをメモするのではなく、言葉によって表された概念をメモするのである。つまりノートテーキングの原則は「最も少ない労力で最も復元可能性の高い記号や略語を用いる」ことである（友野ほか 2012, p.39）。

速記と違い、ノートテーキングには絶対的ルールはない。通訳者はあくまでスピーチ内容を覚えるよう努力し、その記憶があいまいにならないように記憶の「道しるべ」として要所要所でメモをとるのである。記号や略語はそれぞれの通訳者にとって書きやすく、内容を思い出しやすいものでかまわない。とはいえ一からすべてオリジナルでメモを作り上げるのも大変な労力が必要であるため、多くの通訳者はフランス人のロザンがまとめた通訳メモ「7つの基本ルール」や、ドイツのハイデルベルグ大学で教えられている「マティセック方式」などを参考に、独自のメモ方式を考案している。表3にロザンの「7つの基本ルール」を示す（友野ほか 2012, pp.39-40）。

ロザンは基本ルールに加えて「10の基本記号」を提案している。例えば「言う」は「”」、「考える」は「:」となる。「言う」は発言を囲う「”」（クォーテーションマーク）であり、「考える」は抽象的内容を具体的に説明する際に使われる「:」（コロン）であるため連想がしやすい。また「言う」「考える」はどのようなスピーチにも何度も登場する表現である。このような記号の他に、通訳者一人一人が独自の記号を作り通訳メモをとる。画数が少ないときには、ひらがなや漢字も交えることがある。例えば「～今」は「これまで」を表し、「今～」は「今後」を表し、「～今～」は「常に」を表すと本人が決めれば、それでよしということである。

表3 ロザンの7つの基本ルール

ルール		センテンス	ノート例	
1	語句に拘わらず、概念をノートする			
2	略語、略式表記のルールを決める	語尾で区別	commission committee C om C tee	
		時制 (過去 ed 未来 wl など)	discussed dis ed	
		複数 (s) つける	countries □ s	
3	つなぎ言葉	スピーチの構成をあらわす マーカー	first 1 st	
		接続詞	順接	so, therefore →, ∴, so
			逆説	on the contrary BUT
			例示	as..., for example ex)
			但し書き	although, while Tho
仮定	If...then... If...→...			
4	否定	斜線を書く No を書き入れる	We can not agree We / agree We no agree	
5	強調	強調するときはアンダーライン	It is very interesting It <u>int</u>	
		弱めるときは点線	It is rather interesting It <u>int</u>	
6	縦に列挙			
7	字下げ			

「うれしい」「悲しい」などの感情はシンプルな顔文字を書くこともできる。起点言語 (SL) と目標言語 (TL) のどちらの言語でメモを取るかについては、通訳する際に見たままの言語で訳出できるため、目標言語 (TL) で取ることが推奨されているが、日本人の場合は漢字なども利用するため、必ずしもその原則に従っていない通訳者も多い。全ての通訳者が共通で守るべき項目としては、(1) 数字、固有名詞は必ず書く (2) 左上 (主語) から右斜め下 (動詞、目的語、詳細情報等) へ書き、話の区切りごとに線を引くなどして区切る、という2点がある。

ロザンの「7つの基本ルール」に対して、「マティセック方式」のメモはおそらく数百にのぼる記号が決められており、聞くとところによるとハイデルベルグ大学の通訳コースに入学する際には、この記号を暗記していることが前提になっているようだ。「7つの基本ルール」を土台に個人で通訳メモ方式を作り上げていくフランスの流れと、あらかじめ細かいルールが微に入り細に入り決められているドイツの流れは、いかにもフランスとドイツの国民性を表しているようで興味深い。筆者は2014年9月に関西大学で開催された“International Colloquium on Interpreter Education”に参加し、ドイツから招いた講師による「マティセック方式」の講習を受けた。学んだことの一例を挙げると、ギリシャ文字一つ一つに意味がある（例： a は「仕事」、 π は「政治」など）が、これらをすべて覚えていくのはなかなか骨が折れる作業である。また、マティセック方式を説明した書物で英語や日本語に翻訳されたものがないため、日本人通訳者の多くは「ロザンの7つの基本ルール」を参考に、独自の通訳メモを開発している。通訳メモの具体例として、先述した原辰徳元監督の3分半に及ぶスピーチの書き起こし原稿とその冒頭部分の通訳メモ例を示す。なおこのスピーチは筆者がYouTubeから書き起こしをして、句読点を付けたものである²⁾。また「ええ」「ああ」などのフィラーは（ ）で表した。3分半のスピーチを、逐次通訳することは容易ではない。そのことを追体験するには、原辰徳元監督のスピーチを日本語から日本語へ逐次通訳するという方法がある。以下のAとBの二つの手順で行ってほしい。

[A：日本語から日本語へのメモなし逐次通訳体験]

1. YouTube にアクセスして原辰徳監督のスピーチを、原稿を見ずに聞く。
2. 聞いたことを日本語で再現する。

[B：日本語から日本語へのメモあり逐次通訳体験]

1. You Tube にアクセスして原辰徳監督のスピーチを、原稿を見ずに聞き、自由にメモを取る。このとき音声を途中で止めてはいけない。
2. 聞いたことを日本語で再現する。

「メモなし」では覚えきれず、「メモあり」では書くのが追いつかないのではないだろうか。そのために通訳訓練では、通訳メモの練習をして、効率的に記憶のサポートをする必要がある。

FCCJchannel 日本外国特派員協会 会見映像 オフィシャルサイト
Hara- Matsui- Arai: announcing charity baseball event, "Support Our Kids" by Derek Jeter and Matsui (ウェブアドレスは【註】2)を参照)

[原辰徳監督のスピーチ書き起こし] 9：20～12：55

「挨拶するんですか？（ああ）僕あまり英語が得意じゃありませんので、なかなか理解しなかったんですけど。（ええ）はじめまして読売巨人軍監督原辰徳でございます。（ええ）私は（あの）（ええ）この外国人特派員クラブというところで一度会見がしたいなと常々思っております。（まあ）今日はこういった形の東北復興支援（ええ）サポートアワキッズという中ですね、（ええ）こういう話が出来ると、会見が出来るというのは大変光栄に思っております。（ええ）（まあ）2011年、（ええ）皆さんご存知のとおり、（ええ）東北で（ええ）大変な震災が起き、そして大変な（ああ）被害を...に見舞われました。（まあ）その時に、（まあ）ここにもいらっしやる...いらっしやっていますが、秋沢さんとですね、（ええ）非常にこう色々なこと

を考え、(ええ) なんとか我々が出来ることはないだろうかということで、とにかく子どもたち、(ええ) あなた達は一人じゃないと、色々な境遇な子どもたちがいます。(ええ) そういう中で(ええ) (まあ) 少しでも子どもたちがリーダーとなり、そして社会に飛び立って、(ええ) 旅立っていくということに支援ができないであろうかと、そこからスタートしました。(ええ) もう4年、(ええ) 近くなりますが、(ああ) その復興支援という輪もですね、だんだん広がって、(ええ) このような(ああ) 形になっております。(まあ) この度は、(ええ) メジャーリーグを代表するデレク・ジーター、(ええ) そして私も一緒に同僚として野球をやっていた松井秀喜くん、(ええ) この2人がですね、(ええ) この趣旨というものに大いに賛同してくれてですね、(ええ) 今回(ええ) 素晴らしいイベントとして、(ええ) 大きな意義ある時間を作ってくれるということに対しても、大変感謝しております。(ええ) 森永製菓さんにたってはですね、(ええ) もうスポンサーを我々が、(ええ) やるよということで、手をあげてくださったことにも大変感謝してますし、もし仮に(ええ) この会見を見てですね、(ええ) よし、私達も支援しようというような(あ) の会社あるいは個人の方がたくさんいらっしゃることはですね、(ええ) 今後大きく、(ええ) 子どもたちにプラスになるというふうに思っております。(まあ) 私は今回、(ええ) (まあ) ジャイアンツの監督という立場ではありますが、(ええ) (まあ) キッズクリニック、(まあ) 野球教室、(まあ) そういうことも含めてですね、我々の(ええ) プロ野球人でいいチームを作って、とにかく子どもたちに野球の素晴らしさ(ええ) そして、(ええ) (まあ) いろんな(ええ) 我々、我々と接することによって、(ええ) 我々でもこうやって出来るんだというね、そういうふうな少しでも希望というものが、(ええ) 芽生えてくれたらいいなということで、(ええ) 汗を流す覚

悟しております。(ええ)どうか、このですねイベントが大成功に終わることを祈願しまして私の挨拶に代えます。どうも有難うございました。』

このスピーチ冒頭部分の通訳メモ例を次のページに示す(通訳メモ例1)。通訳メモは、通訳者が座って通訳ができる場合には、A4用紙縦半分に線を引き、書いていくことが多い。これはメモが横に広がりわかりにくくなることを防ぐためである。このスピーチを聞かずにこのメモだけを見ても何を意味しているのかはわからない。筆者も数ヶ月たってから実際の通訳業務で書いたメモを見返すことがあるが、そのメモを基にして当時の通訳内容を再現することはできない。しかしこの程度の記述にとどめなければ、人が話すスピードに遅れずについていき書くことはできない。繰り返しになるが、通訳者はスピーチ内容を覚えていることが原則で、聞いた内容を正確に再現する「道しるべ」として、通訳メモをとるのである。また参考までに筆者が通訳学校で逐次通訳の練習時に書いた通訳メモを示す(通訳メモ例2)。実際の業務で書いたメモは守秘義務があるために掲載することはできないが、このメモは本番と同様の通訳環境で取られたものである。決して理想的な通訳メモではないが、実際にはこのような走り書きになるのだという雰囲気が伝わるものと思われる。筆者が今このメモを見ても、どのような話を通訳したのかは思い出せない。通訳メモはあくまで記憶の補助でしかない。

授業ではロザンの「7つの基本ルール」を教えた後、テキストやYouTubeの英語映像を用いて逐次通訳の演習を行う。学生一人一人がメモを取り、指名された学生が聞いた音声を日本語に訳していく。また、時には指名された学生が音声を聞きながら黒板にメモを取り、それを全員で検討するというも行っている。日本語から英語への逐次通訳もまれに行うことはあるが、英日逐次通訳を行うことが圧倒的に多い。今

後、学生の英語表現力向上のためにも、日英逐次通訳の機会も増やしていきたいと考えている。

なお通訳メモに関しては、本講座でも参考文献として使用している『よくわかる逐次通訳』（ベルジュロ伊藤ほか2009）、及び熊谷（2015）の論文『入門レベルの英語通訳ノートテイキング指導』にわかりやすい解説があるため参照されたい。

通訳メモ例 1

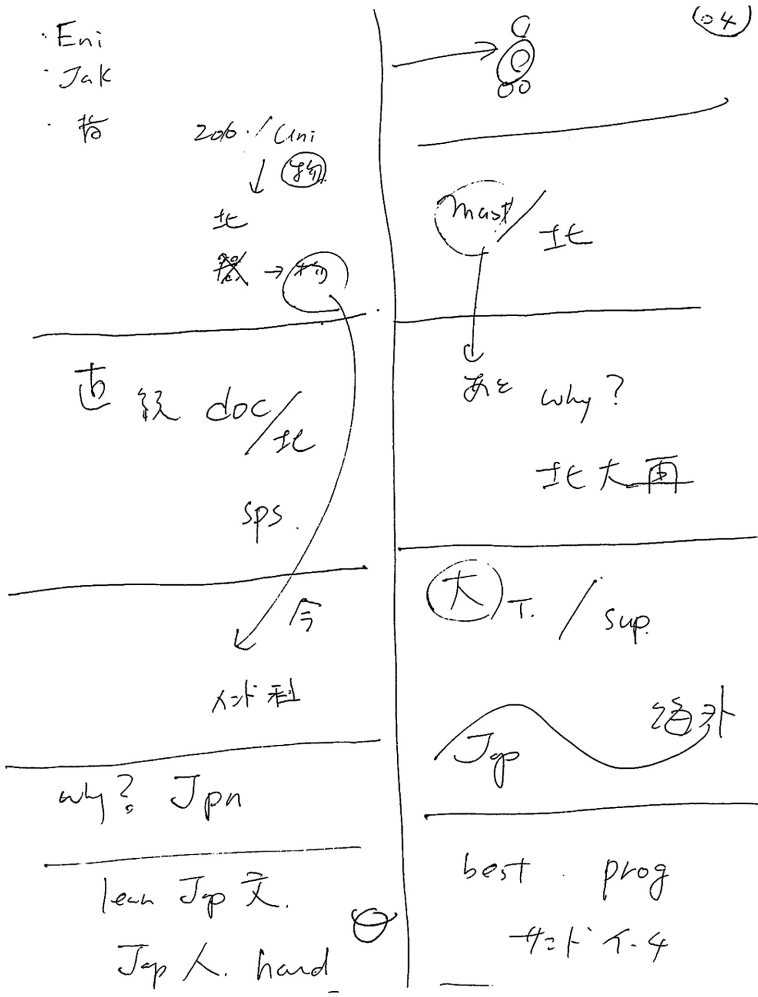
〔辰徳監督スピーチ冒頭部分の通訳メモ例とその解説〕

「挨拶するんですか？（ああ）僕あまり英語が得意じゃありませんので、なかなか理解しなかったんですけど。（ええ）はじめまして読売巨人軍監督原辰徳でございます。（ええ）私は（あの）（ええ）この外国人特派員クラブというところで一度会見がしたいなと常々思っております。（まあ）今日はこういった形の東北復興支援（ええ）サポートアワキッズという中でですね、（ええ）こういう話が出来ると、会見が出来るというのは大変光栄に思っております。（ええ）（まあ）2011年、（ええ）皆さんご存知のとおり、（ええ）東北で（ええ）大変な震災が起き、そして大変な（ああ）被害を...に見舞われました。」

<p>”</p> <hr/> <p>Eng</p> <p>☹</p> <hr/> <p>G</p> <p>○</p> <p>↑</p> <p>T H</p> <hr/> <p>～今～：</p> <p>FCCJ</p> <p>”</p> <hr/> <p>i 支</p> <p>”</p> <p>光</p> <hr/> <p>2011</p> <p>大じ</p> <p>∴</p> <p>大ひ</p>	<p>「 ” 」は「話す」→「挨拶する」</p> <hr/> <p>「Eng」は「英語」</p> <p>「☹」は「得意じゃない」</p> <hr/> <p>マティセック方式では</p> <p>地位の高い人を長い棒で</p> <p>低い人を短い棒で表す</p> <hr/> <p>「：」は「思う」</p> <p>「～今～」は「常日頃」</p> <p>「FCCJ (The Foreign Correspondents' Club of Japan)」は</p> <p>「日本外国人特派員協会」</p> <hr/> <p>「東北復興支援サポートアワキッズ」</p> <p>のような固有名詞はあらかじめ覚えて</p> <p>記号を決めておく（ここでは「支」）</p> <p>「i」は「今日」</p> <p>参考までに「・i」は昨日、「i・」は明日</p> <hr/> <p>∴は「その結果」</p>
---	--

通訳メモ例 2

[筆者が実際に書いた通訳メモ例]



4.2.3 「筆者が実際に書いた通訳メモ例」の分析

通訳メモは大きめに書くことが推奨されている。メモ取りは時間との争いであるため、メモは走り書きにならざるを得ず、小さく書くと何を書いているのか解読できなくなる恐れがあるからだ。しかし、筆者のメモ例は文字（または記号）が他の通訳者と比較すると大きいと言える。大きいと見やすいというメリットがある代わりに、メモパッドを何度もめくらなければならず、それにより時間をロスするというデメリットが生ずる。

左側の一番目のセクションに「物」という漢字が2回書かれている。一度出てきた言葉が再び登場するときは、最初に書いた字から矢印などを使い、時間を短縮するというのが原則である。「物」が3度目に登場したときには（左側三番目のセクション）、矢印が利用されている。

左側一番下のセクションに、○の中央に線が引かれた土星のような記号がある。これは“global”“international”等の意味で用いられる記号で、地球に赤道が描かれている。

右の一番目のセクションに描かれている絵は日本を表していると考えられる。通訳メモを取っているときは「作業記憶」（目や耳から入る情報の処理に使われる記憶）の負担が増加する。そのことにより、聞いている言葉を既存の知識と結びつけながら理解する「認知記憶」の余力が減少し、それが訳出精度の低下につながることもある（ベルジュロ伊藤ほか2009）。そのため極力無駄は排除しなければならない。

右側の下から2番目のセクションには「海外」という漢字が書かれている。ロザンの基本シンボルでは、「国」を「□」で表し、「国際」を□の中に×を入れた記号で表している。前述したとおり、筆者は「国際」を地球に赤道がある記号で表しているため、「海外」を表すのに□の中に×を入れた記号を用いることができたと反省している。また「Jap」と「海外」の間にある波のような記号は、筆者オリジナルの“not only A but

also B”を表す記号であることから、おそらくここでは「日本ばかりでなく海外でも」という文脈であったのであろうと推測できる。「Jap」は本来「JPN」であるが、時間がなければ「JP」とすることもあろう。ただし「日本」なのか「日本人」なのか訳出時にわからなくなならないように、例えば日本人であれば「J人」などと明確に区別する必要がある。右側最後のセクションの「サンドイッチ」は「サンド」などと短くするべきであった。

このメモ例では意味の区切りごとに横線を引いているが、これには時間を短縮する別の方法がある。横線の代わりに右端にカギ括弧 (]) をつける方法である。熊谷 (2015) で具体例を参照することができる。また訳出が終わったセクションは、斜め線を入れて消すことが推奨されている。どこまで訳したかが分からなくならないためである。

通訳メモは十人十色であり、各自が自分にとって最適のメモを作り上げていくものである。筆者自身の経験と反省を、学生の指導に生かしていきたい。

4.2.4 同時通訳演習

同時通訳とは文字通り発言者が話をしているのと同時に訳していくことである。例えばNHKの夜7時及び9時のニュースでは、副音声で日英同時通訳を聞くことができる。同時通訳者は通訳ブースに入り、ヘッドフォンをして2人から3人が15分交替で訳出するのが一般的である。ブースやヘッドフォンを使わずに、簡易同時通訳機器を用いて同時通訳が行われる場合もある。通訳者はポータブル簡易マイクに向かって通訳を行い、聞き手はレシーバーについているイヤホンから訳語を聴く。また、一切機器類を用いずに、聞き手の耳元で同時通訳をしていくこともある。これは「ウイスパリング同時通訳」と呼ばれており、聞き手が少人数でかつ機器類がない場合に行われることがある。

筆者の専門ゼミでも同時通訳演習を行っている。テキストやインターネットから題材を選び、第4.1節で示したような個別技能訓練を行い、十分に内容を把握した上で、同時通訳演習を行う。今年度題材として利用したものに、西畑（2017）が東京外国語大学の通訳授業で使用したTEDのビデオがある³⁾。TED（Technology Entertainment Design）では、多様な国籍の様々な分野における専門家などが行うプレゼンテーションを動画で配信しており、TEDの動画を題材にした大学用教科書も発売されている。また、NHKの番組「スーパープレゼンテーション」でもTEDの動画が利用されている。西畑（2017）及び筆者の授業で利用した動画は、アメリカ人による約3分間の短いスピーチで、話題が日常的事から本学の学生にも利用可能と考えた。後期のゼミで毎回学生にシャドーイングをさせることで、内容を十分に把握させ、時には日本語字幕を出しながら動画を視聴させた。その結果、ほとんどの学生は、同時通訳をしたときには沈黙せずにある程度日本語にすることができた。基礎訓練から一步一步ステップを踏みながら準備をさせることで、本学の学生にも同時通訳演習を行うことが可能であることが明らかとなった。学生は柔軟性が高い。教員側が「学生に同時通訳は難しすぎる」という先入観を持たずに指導していくことの重要性を再認識した。

4.3 通訳訓練以外の活動

立教大学では「翻訳通訳と現代社会」という全学共通カリキュラムの授業で「翻訳通訳リテラシー教育」が行われている（武田ほか2014）。この授業では、毎回ゲストスピーカーが翻訳通訳に関する様々な分野について講義を行い、毎回講義の最後に全学生が「リアクションペーパー」を書き、それが担当講師に渡される。担当講師はすべての「リアクションペーパー」に目を通し、次の授業までに質問等に回答をする。回答は次の講義時間の冒頭で発表される他、受講者がアクセスできるウェブサ

イトにアップされる。筆者も 2017 年 5 月にゲストスピーカーとしてプロ野球球団通訳者に関する講義を行い、約 100 名の受講生全員が書いた「リアクションペーパー」を読み、その約半数の学生からの質問に文書で回答をした。この授業を運営している武田 (ibid.) はゲストスピーカーの講義に対する学生の反応として「スピーカーのプロフェッショナルリズムへの深い感銘」(p.7) や「社会の様々な場面における翻訳通訳実践の役割を具体的に理解し、その重要性について実感できた」(p.7) ことなどを挙げている。さらに「履修者は実際に翻訳や通訳を試みることに強い関心と喜びを持ち、そうした直接体験を通して、翻訳通訳についての知識や理解が深まるようだ」(p.7) とも述べている。本学の「通訳入門講座」でも、学生の通訳に対する理解を深め、さらに、実際に通訳体験をするという目的で、本年度は 4 人のゲストを招待した。

4.3.1 Gary Marston 氏 (イギリス人男性 / 9 月)

本学の学生が短期留学及び春季イギリス語学研修旅行で訪れている Warwickshire College の International Business Development Manager。本年度 9 月に来校された際に、本専門ゼミにゲストとして招待した。学生は大学構内を英語で案内した。13 名の学生が 4 つのグループに分かれ、それぞれが案内する場所と内容を決定し、リハーサルを経て本番を迎えた。学生は食堂、図書館、各教室などを、構内を歩きながら説明し、その後ゼミ室で Marston 氏と英語で交流をした。学生にとっては、準備を通して自分の大学に関する知識を整理しながら英語表現を身につける機会となった。また Marston 氏には、本学に対する理解を深めていただく場面を提供することができたと考えている。

4.3.2 Nigel Turner 氏 (イギリス人男性 / 10 月)

Nigel Turner 氏は筆者の友人であり、2 年前にも筆者の授業に参加し

ている。13名の学生が3つのグループに分かれ、各グループでTurner氏に日本の紹介を行った。この活動は通訳業務の中でも、通訳案内士(通訳ガイド)の体験をすることを目的としている。通訳案内士は外国人観光客に日本文化を紹介する大切な役割を果たすことから、「民間外交官」とも呼ばれており、本学の学生も「民間外交官」としてTurner氏がまだ知らない日本を紹介することを目指した。一つ目のグループはTurner氏とスーパーへ行き、日本にしかない食材や珍味等について調べ、それを英語で説明した。二つ目のグループは、大学近くに住む学生の家でたこ焼きを一緒に作って食べた。三つ目のグループは、Turner氏がイギリスの航空業界で仕事をしていることから、ある学生の自宅近くにある丘珠空港を見学し、その後その学生の自宅でお父さん、お母さん、お兄さんとも交流をした。この活動においても、学生は事前に説明する内容を調べ、授業でリハーサルを行ってから本番に臨んだ。

4.3.3 Asal Ilyas Awan さん (女性 / 11月)

筆者の友人で、札幌在住1年のパキスタン人女性がいる。彼女の夫の留学に伴い来日した。パキスタンでは学校教育を英語で受けており、Awanさんは経営学の修士号を取得している。昨年度は基礎ゼミ及び専門ゼミのクラスでパキスタンに関するプレゼンテーションを英語で行ってもらった。今年度の専門ゼミ生は大半が昨年の基礎ゼミ生であるため、今年度はAwanさんにイスラム教について英語でプレゼンをしてもらい、学生がそのプレゼンを日本語に訳すという逐次通訳実践演習を行った。学生はAwanさんがあらかじめ用意した原稿を予習した。予習の際には英語ばかりでなく、イスラム教にまつわる正しい知識を学習する機会を得た。例えばユダヤ教、イスラム教、キリスト教の神は同一であるということはこの機会に初めて認識した学生も多かった。プロの通訳者は毎回様々なテーマについて通訳を行うため、その都度新たな分

野について勉強をする。例えば筆者がここ数ヶ月の間に行った通訳業務のテーマは、労使協定、海底ケーブル、映画祭、商談など毎回異なるテーマであった。通訳者は通訳内容に関する知識を頭に詰め込み、話の流れを予測しながらキーワードリストを作り、専門用語を覚えていく。

この通訳体験を通して、学生は通訳業務の大変さを実感できたようだ。それと同時に、通訳を依頼する際にはあらかじめ原稿などの情報を提供することで、訳出の精度が大きく上がることも理解できたはずだ。「通訳者なら何でも通訳できる」というのは大きな誤解である。よりよい通訳をしてもらうためには事前資料の提供が欠かせない。またスピーチの長さが1分を超えると、通訳者の訳出精度は下がっていく（新崎 2016）。報道では時折通訳者の誤訳が取りざたされることがあるが、その原因は通訳者の能力や不手際だけにあるのではないと考えられる。通訳ユーザーが原稿を用意しない、何についての通訳なのかを説明しない、速いスピードで話す、一度に1分以上話すなど、話者が通訳行為に対する理解に欠ける行動をすることも誤訳の引き金になる。学生は実体験を通して初めて通訳に対する正確な理解が可能になると筆者は考える。

4.3.4 佐藤英明さん（日本人男性／12月）

佐藤英明氏は日本人メジャーリーガーの通訳者である。シーズンオフにアメリカから一時帰国をし、九州のご実家に帰省する前に来札され、本ゼミナールへお招きをした。佐藤氏はその経歴が興味深い。高校卒業後、野球を追求するためにアメリカへ留学している。学業と野球を両立させた後、大学野球チームのコーチを経て大リーグでインターンとして働く。その後北海道日本ハムファイターズの通訳を4年間勤める。しかし、さらに大きな夢に向かって自主退社をし、2年間の求職活動の末、2015年シーズンに大リーグ・テキサスレンジャーズでダルビッシュ有投手の通訳者となる⁴⁾。授業は、佐藤氏及び学生による英語での自己紹介

から始まり、次に佐藤氏の日本でのヒーロー・インタビューやアメリカでの記者会見の通訳映像を視聴しながら、通訳技術について話してもらった。その後NPB（Nippon Professional Baseball Organization、日本野球機構）とMLB（Major League Baseball、大リーグ）での仕事内容・裏話などを、学生の質問に答える形で語ってもらった。佐藤氏は、自分には「野球人」としてさらに大きな目標があり、現在は次の目標に向かって始動しようとしているという抱負を語った。学生は「あとからあれをやっておけば良かったと後悔をしたくない」という佐藤氏の言葉に感銘を受けていた。

4.3.5 専門ゼミにおける実践的活動に関するゼミ生の感想

授業にゲストを招いて行った授業は、どれも学生に好評であった。通訳そのものに関する主な意見としては「実際に通訳をしてみないとわからない難しさを実感できた」「背景知識を調べることが大切だということがわかった」「事前準備の大切さを実感した」「日本語も含めて言葉について深く考えるきっかけになった」「プロの通訳を聞いて感激した」などというものがあつた。そのほかの意見としては、「もっと英語を勉強したいという気持ちになった」「英語の深さを実感できた」「現場の話をプロから聞けるのは勉強のモチベーションになった」「近い距離で対面できたためインパクトが大きかった」「日々勉強と努力を続けなければいけないと改めて思った」「はっきりと言葉では言うことができないけれど、経験しないとわからない感情があつた」などが挙げられる。授業内でゲストを招いて通訳をする機会があること、また、プロの通訳者から話を聞くことは、学生の英語に対する意識ばかりでなく人生に対する意識にも好ましい影響力をもつということが、学生のコメントから明らかになった。

5. 通訳という職業を通じて「人類文化の発展に尽す」卒業生たち

本節では通訳案内士として活躍する二人の卒業生に行ったインタビューから、「通訳」という職業が女性の人生設計に果たす役割の可能性を考察する。

5.1 三浦由利子さん（旧姓佐藤由利子さん）

函館東高校（現市立函館高校）出身。1979年に北海道武蔵女子短期大学を卒業。当時は男女雇用機会均等法も成立しておらず、女性は4年制大学を卒業するよりも短期大学を卒業する方が就職しやすいと言われた時代である。三浦さんはご両親の勧めもあり本学英文学科へ進学をする。当時は武蔵生専用の寮があったということも、本学に進学したきっかけになったそう⁵⁾。三浦さんは、授業には真面目に出席をして英検2級は取得したものの、英語力を高めるための特別な努力をしなかったことを「今思えばとてももったいなかった」と述懐している。通訳案内士の国家試験が存在することすら当時は認識していなかったようだ。また英文科での2年間は人生の中でも最も積極性に欠け、自分に自信が持てずいたとも語っている。しかし卒業を間近に控え「自分に自信を持ちたい」という思いが強くなったときに、「英語だ」と考えたそうだ。そのため留学を目標に地元で就職をして、3年間で留学費用200万円を貯め、反対する両親の説得に成功し「いざ留学」という段階にまでこぎつけた。しかしその頃現在のご主人との出会いがあり、最終的には留学ではなく結婚を選択した。3人のお子さんにも恵まれ、結婚の選択は今でも後悔はしていないと語っている。10年ほど専業主婦として英語から離れた後、忘れ物を取り戻すかのように英会話教室に通い始めた。しかし英会話だけでは物足りなくなり、函館大学の聴講生となり英検準1級の勉強を開始した。三浦さん曰く「とにかく何回も落ちて最後にやっと

合格した」のが2004年、45歳の時である。当時「ただの主婦」⁶⁾が大学の聴講生として勉強を続け英検準1級に合格したことは、2紙の新聞に掲載された。その際に「次の夢は何ですか？」と質問を受け、思わず「海外添乗員なんていいかしら…」と軽く話したことが新聞に掲載されてしまい「引くに引けない」状態になってしまったという。そして「国内添乗員」として経験を積むところから出発したのが46歳の時だ。その後「海外添乗」も経験したが、「地元で長く続けられる仕事」「私にしかできない仕事」と考えたときに、「通訳案内士」の国家資格があることを知った。4年間お弁当持参で図書館通いをして、1日3時間から8時間、通信教育のテキストと通訳案内士用問題集、大学受験用の英語問題集で受験勉強をした。そして2014年2月に難関国家試験である「通訳案内士」試験に見事合格した⁷⁾。

三浦さんは2014年5月に「通訳案内士」デビューを果たした。主な仕事は、函館港に入るクルーズ船の乗客が参加するエクスカッション・バスツアーのガイドである。通訳ガイドの報酬は半日¥24,000～¥27,000、1日¥33,000～¥36,000。そのほかFIT (Foreign Independent Tour) という小さなグループを案内する仕事もある。数人の観光客を公共の交通機関などを使って案内する柔軟性の高いツアーだ。報酬は1日¥25,000前後である。この金額は支払う側からすると高いと思うかもしれないが⁸⁾、通訳案内士は観光地についての勉強を重ね、自費で下見や研修を行い、よりよい案内ができるよう日々研鑽している。さらに、国家試験に合格できるまでの英語力を身につけるために投資した年月や費用を鑑みると、通訳料金は決して高いものではない(木村2017)。

三浦さんはこの仕事に大いにやりがいを感じていると語っている。
(1)自分が身につけた英語力を生かせること (2)自分でなければできない仕事であること (3)いろいろな人と接することができること (4)毎日

ではなく自分のペースで働けること (5)自分が生まれ育った大好きな函館を海外の方に紹介できることなどの理由から、三浦さんは「夢の仕事」に就けたと話している。今では東京、青森、秋田と本州を案内する仕事も依頼されるまでになったと聞いている。

本インタビューでは、英語力と通訳技術を身につけることが「夢の仕事」につながったという卒業生の貴重な体験談を聞くことができた。三浦さんは、当時の武蔵の授業に通訳講座があれば、このような仕事の存在をもう少し早く知ることができたので、現在ゼミで「通訳入門講座」が行われていることは、学生にとって好ましいことであると話されていた。

5.2 高島のりさん (通称名) (本名 寺木のりさん / 旧姓 高島のりさん)

札幌北高等学校卒業。1982年に武蔵女子短期大学に入学。高校卒業後、高島さんは医学部をはじめとする国立大学の理系学部を目指して勉強していた。しかし志望校に合格できず、本学の後期試験願書受付最終日に速達で受験届けを郵送し、なんとか受験資格を得て、英文科に合格をした。しかし高島さんはもともと理系の4年生大学を目指していたため、入学当初は挫折感を覚え「短大の英文科に入学して意味はあるのか？」と悩んでいたようだ。ところが周りの同級生たちはみな本当にポジティブに生き生きと生活しており、またバイト先では「武蔵です」と言うと「うっそー、すっごーい、頭いい」と尊敬され、武蔵に対する世間からの評価をそのとき初めて認識したようだ。「北海道一の就職率を誇る、本当に良い短大に入学したんだ」ということに気がついてからは、当初武蔵に不満を抱いていた自分が恥ずかしくなり、「いつまでもくすぶってはられない。負けられないぞ！ 2年間で取れるだけの単位を取り、教職の資格も取り、武蔵で燃え尽きよう」と決心したそうである⁹⁾。大学祭では「ジャズ喫茶をやりまーす！ 一人でもやりまーす！」と宣

言すると学内外から協力者が現れ、北大や札幌大のジャズ研メンバーらの生演奏をバックにジャズボーカリストとして歌を披露し、大反響を得た。卒業後は英語講師として札幌の英会話スクールに就職した。7年勤めた後結婚などを機に退職し、その後フリーランスで英語の家庭教師などをしていたが、出産後は専業主婦となった。子供が10歳になった2008年に洞爺湖サミットがあり、JICE (Japan International Cooperation Center) という組織が通訳の募集をしていたのに応募して見事合格する。実は高島さんは専業主婦をしていた約7年間、地道に英語の勉強を続けていた。「マミーズイングリッシュサークル」という英語サークルに参加し、子供を託児室に預け、お金を出し合ってネイティブの先生をお招きして、お母さん仲間で英会話の勉強をしていたのだそう。また、「マミーズイングリッシュサークル」を卒業したお母さんたちで結成した「モーニンググローリー」という時事英語研修サークルに高島さんは今でも参加している。武蔵在学中に英検2級を取得して以来、このように英語の勉強を続けてきた。通訳デビューは2009年。JENESYS programme (Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths 「21世紀東アジア青少年大交流計画」) で東アジアの若者の視察団の通訳を務めた。しかし英語が話せることと通訳ができるというのは同じではないということをこのときに認識し、この経験を契機に通訳専門学校に通い始めた。また、この時期に「北海道地域限定通訳案内士」という資格試験制度が設けられ、2度目の受験で合格し、晴れて「通訳案内士」の資格を取得した。その後ご両親の介護など紆余曲線を経て、「通訳案内士」としてデビューしたのが2012年である。通訳の世界も通訳ガイドの世界も新人が仕事を得るのは難しい。しかし明るく人なつこい人柄も手伝って、高島さんは札幌でも売れっ子の通訳案内士となっていく。

「この仕事は楽しい」と高島さんは断言する。自身の都合で一時仕事

を離れ復帰したときにも、高島さんをお願いしたいとすぐに仕事が入り、この仕事をやっていて良かったと感じたそうである。これは三浦由利子さんが「自分にしかできない仕事」と語っていたことに通ずる。他の人で取り替えのきかない「自分の存在価値」を実感できる仕事に出会えたという思いが、卒業生二人のお話から感じられる。高島さんがエージェントから受け取った顧客からのアンケートには、“She is exceptional”「彼女は別格」“She is among the best we have ever had as the guide”「これまでのガイドの中で最高の一人」“Her English is easy to understand”「彼女の英語は聞きやすい」“She was articulate and informative”「言葉がはっきりしていて知識が豊富」(翻訳は筆者)などと顧客から賞賛の言葉が寄せられていた。

高島さんは「なんで私なんか？」と思いながらも、2017年秋からはNPO 法人北海道通訳案内士協会副理事長となり、通訳案内士の質・地位の向上に尽力している。また、全国の他の通訳案内士団体との交流、新人通訳ガイド向けの説明会や研修会を担当する役割も担うようになった。またガイドだけではなく、国際交流事業や、商談、アテンドなどの一般通訳の仕事も手がけている。2017年アジア冬季競技大会では外国の副首相のアテンドもしたそうだ。「でも、やっぱり現場が一番好き！お客様に楽しんでいただきたいから。それにチップなんかもらえると自分のサービスを気に入ってもらえたんだなあ〜と、素直にうれしくなってしまうんです！」と高島さんは話していた。

通訳案内士はバスの中でお客様を楽しませるためにクイズを出し、歌も披露するそうだ。武蔵祭で培った人前で唄う経験が後の人生で生かされるとは、学生時代には思いもよらなかったのではないだろうか。

5.3 「自己実現」の手段としての英語

日本の女性活躍度は先進国の中で最下位である。ダボス会議を主催す

る「世界経済フォーラム」は2017年11月2日に、男女格差の度合いを示す「ジェンダーギャップ指数」の報告書（2017年版）を発表した¹⁰。日本は世界144カ国中114位で、先進国の中で最下位である。しかも2015年の101位、2016年の111位から年々後退を続けている。佐々木（2016）によると、日本の女性が仕事を辞める主な理由は家事・子育てと仕事の両立が困難であることである。実際本調査でインタビューをした二人の卒業生も、一時期専業主婦となり子育てに専念している。佐々木（ibid.）は男性社会である日本で女性が仕事を続けることの難しさに言及している。しかし二人の卒業生は、家事の合間に地道に勉強を続け、子育てを終えてから「私にしかできない仕事」に就くことができた。「通訳案内士」の仕事には定年がなく、仕事をする日を選ぶことができる女性にうってつけの専門職である。生き方は人様々だ。卒業時に就職した会社で定年まで働き続けることもあるであろうし、結婚をせずにまたは子供を産まずに仕事に専念することも一つの生き方である。しかし結婚もしたい、子育て中は家庭に専念したいという女性にとっては、英語力が子育て後に第2の人生を切り開く強力な武器となり得ることを、三浦さん、高島さんというお二人の卒業生が示してくれた。

6. 今後の展望

6.1 専門ゼミナール「通訳入門講座」の課題と目標

2014年度から開講してきた本ゼミナールでの課題は次の通りである。まず、学生間の英語力の差が大きいことが挙げられる。そのため、上位の学生に刺激的な指導を行うことが難しい。東海大学札幌キャンパスでは成績上位層を伸ばすことを重要視して通訳講座の受講資格を設けており、本格的な教材で授業を行っている。それにより数ヶ月でTOEICの点数が300点ほど上昇した事例も報告されている¹¹。しかし本学でそのような受講資格を設けることは現実的ではない。そのため取り組みやす

いテキスト教材と、本格的なインターネット上のスピーチ等を組み合わせ、どの層の学生も満足するような内容を少しずつ組み合わせる方策をとることを心がけたいと考えている。

第二に設備の問題である。インターネットの映像等を多く利用するため、これまでCALLで授業を行ってきた。しかしCALLでは、教師と学生間に大きな机があり物理的に距離が大きく、そのことが精神的な距離も大きくしていると筆者は感じてきた。また学生は横向きのモニター画面に向かって着席するため、教師が話をしているときに学生が話す人のほうを向かない、また学生同士は背中合わせになるという問題が発生した。そのため、教師が話すときには教員用のパソコンがある大きな机を迂回して学生がいる側に移動して立ち、さらに学生同士が顔を向き合わせるように椅子の向きを変えさせた。しかし、インターネットを利用して授業を行うときになると、またそれぞれの学生が背中合わせに画面に向かうことになり、ゼミとしての一体感が生まれにくい状況にあった。来年度はアクティブラーニング用の可動式机とwi-fiを完備した教室が設置されるため、第4.2.3節で紹介した西畑(2017)を参考に、CALLではなくスマホを利用した授業を展開する予定である。それにより、学生が一つのスクリーンに集中できる、または、お互いの顔を見ながらペアワークを行うことができる状況を作り、より強い一体感を作ることを来年度の目標とした。同時通訳演習では、インターネットの音声を全員同時にヘッドフォンで聞くことが必要であるが、その点は来年度新設予定の教室では解決できないため、今後の検討課題とする。

第三の課題として、通訳を実際に行う現場が少ないということが挙げられる。プロの通訳者の間では、実際に通訳業務を行うことが最上の勉強法だと言われている。大学における通訳授業でも、履修者が実際に通訳を試みることで通訳に対する関心と知識が深まる(武田ほか2014)。そのため、第4節で述べたように、筆者の個人的な人脈を活用してゲス

トを呼び、学生に通訳実務体験の機会を与え、通訳者から直に話を聞く場を学生に提供してきた。しかし、ゲストへの謝礼は筆者個人が負担している。各教員が各個研究費をゲストへの謝礼に利用できるような仕組みを作ることはできないのであろうかと、筆者は思っている。

来年度のあらたな取り組みとして、宿題として音声ファイルを提出させることを試みたい。言葉は話す、または、書くことがアウトプットとなるが、話したかどうかを確認することは困難であった。しかし今後はスマホの録音機能を利用して、学生が授業外で英語を話すことを促していきたい。

6.2 本学における通訳教育技法を取り入れた英語教育の提案

第1節で触れたように、通訳訓練法を取り入れた英語授業は、英語力向上に有効であるため、首都圏ばかりでなく札幌の主要大学でもゼミではなく授業として開講されている。通訳訓練法を取り入れた英語授業を行うことは、文部科学省の方針にも沿う（第3節参照）。英文学科が設置されている本学でも、そのような講座の設置を検討することを提案したい。

2016年のリオ・オリンピック・パラリンピックに、東京外国語大学の学生がボランティア通訳として大学から派遣された¹¹⁾。2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催され、また、札幌は2026年の冬季オリンピックを招致する予定である。本学の学生も、そのような大会でボランティア通訳をすることができれば、それは彼女たちの大きな財産になるであろう。そのため、本ゼミの学生がボランティア通訳をする実力をつけられることを、今後の専門ゼミの第一の目標としていきたい。筆者は通訳専門学校で代講授業をすることがある。そのとき受講生の中に30代半ばと思われる本学の卒業生がいた。彼女は第二の人生として、現在通訳を目指して勉強しているそうだ。そして「私が学生の時にも武

蔵に通訳授業があればよかったのに」と話していた。本学卒業後すぐに通訳になることは現実的ではないかもしれない。しかし卒業後何年かたってから人生を切り開く手段として卒業生が通訳（案内士）を選択したときに、多少なりとも本講座での経験が役立つことを願い、本稿の結びとしたい。

【謝辞】

本専門ゼミナールに来て下さったゲストの方々、本稿のインタビューに応じて下さった卒業生の方々、アンケートに回答してくれた本専門ゼミナールの学生に、心からの謝意を表明いたします。

【註】

- 1) 2017年11月25日(土)に札幌の天使大学で行われた「日本コミュニケーション学会 北海道支部第26回北海道支部研究大会」における、北間砂織東海大学札幌キャンパス非常勤講師の発表に基づく。
- 2) FCCJ channel 日本外国特派員協会 会見映像 オフィシャルサイト Hara- Matsui- Arai: announcing charity baseball event, “Support Our Kids” by Derek Jeter and Matsui (9:20~12:55)
【Online】<https://www.youtube.com/watch?v=CFOr9gcf9Mo> (2018年1月6日)
- 3) “Try Something New for 30 days”
【Online】https://www.ted.com/talks/matt_cutts_try_something_new_for_30_days (2017年12月31日)
- 4) ダルビッシュ有投手は2017年8月にロサンゼルス・ドジャーズに移籍したため、佐藤英明氏もロサンゼルス・ドジャーズに移籍している。
- 5) この寮は1年生のみ対象の寮であったようだ。
- 6) 三浦さんの発言から引用。
- 7) 2017年5月に「改正通訳案内士法」が成立し、今後通訳の有償ガイドを

無資格でもできるようになる見通しである。これはインバウンド（訪日外国人）の受け入れ拡大のための措置である。当然のことながら、有資格ガイドに優先的に仕事依頼がくることが予想されている。

- 8) この金額は通訳案内士がエージェントから受け取る金額であるため、サービスを受ける観光客はさらに多くの金額を支払っている。
- 9) 当時は本学で英語教員免許を取得することができた。
- 10) 「日本のジェンダーギャップ指数、過去最低を更新 114 位に」『HUFFPOST』【Online】http://www.huffingtonpost.jp/2017/11/01/nippon_a_23263093/（2017年1月3日）
- 11) 2017年9月9日に愛知大学で開催された日本通訳翻訳学会第18回年次大会・公開シンポジウムにおける鶴田知佳子・東京外国語大学教授の発表「オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア活動の参画と役割」から得た情報である。

【参考文献】

- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching: An argument for reassessment*. Oxford: Oxford University Press.
- Dornyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge University Press.
- Hamada, Y. (2014). The effectiveness of pre-and post-shadowing in improving listening comprehension skills. *The Language Teacher*, 38(1), pp.3-10.
- 飯塚秀樹 (2009) 「通訳訓練法による英語力向上の優位性と語学指導への応用—最新の SLA 研究の視座を交えて—」『通訳翻訳研究』第 9 号 pp. 107-122
- 越智美江 (2010) 『TOEIC150 点アップを目指す通訳訓練法』大阪教育図書
- 角山照彦 (2002) 「通訳訓練技法の一般の英語教育への応用について」『広島文教女子大学紀要』第 37 巻 pp.11-20
- 木村護郎クリストフ (2017) 『節英のすすめ 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ!』 萬書房

- 熊谷ユリヤ (2015) 「入門レベルの英語通訳ノートテイキング指導」『札幌大学総合論叢』第 39 号 pp. 1-16
- 佐々木常夫 (2016) 『働く女性たちへ 勇気と行動で人生は変わる』WAVE 出版
- 新崎隆子 (2016) 「英日逐次通訳における記憶の負担と訳出精度」『通訳翻訳研究』第 16 号 pp.1-20
- 染谷泰正 (1996) 「通訳訓練技法とその一般語学学習への応用について」『通訳理論研究』No.11, pp.7-44.
- 武田珂代子・山田優・辛島デイビッド (2014) 「『翻訳通訳リテラシー教育』の提案に向けて」『通訳翻訳研究』14 号 pp.1-14
- 玉井健 (1997) 「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」『時事英語学研究会誌』36 号 pp.105-116
- ベルジュロ伊藤宏美・鶴田知佳子・内藤稔 (2010) 『よくわかる逐次通訳』東京外国語大学出版会
- 友野百枝・宮元友之・南津佳広 (2012) 『通訳学 101～理論から実践まで～』大阪教育図書
- 鳥飼玖美子 (2014) 「日本における通訳教育の変遷」『通訳教育論集』pp.89-97
- 西畑香里 (2017) 「逐次通訳クラスにおけるスマートフォンの活用と効果」『通訳翻訳研究への招待』第 18 号 pp.125-140
- 八島智子 (1998) 「通訳訓練の英語教育への応用 I -shadowing-」平安女学院短期大学紀要『英学』第 21 号 pp.29-37

